

# 序

マウス・ラットを用いた動物実験が、薬物作用の解明などヒト疾患の新しい治療法の開発に極めて重要な役割を果たしてきたことは言うまでもない。マウス・ラットの重要性は、分子生物学をはじめとする基礎研究でも変わらない。分子レベルや細胞レベルで見つけた事実が、本当に生理的に重要な発見であるかどうかを検証するには、マウスやラットを用いた個体レベルの実験が不可欠である。事実、有名誌に論文を投稿すると、しばしばマウスを用いた証明を要求される。しかし、膨大な文献の中から適切なモデル動物を選び、入手先を突き止めるのはなかなか大変な作業である。こんな時に役に立つハンドブックとして本書を企画した。

本書には、医学生物学の研究を進めるために不可欠と考えられる疾患モデルマウス・ラットの表現型、遺伝子情報、使用法、文献、入手法などがコンパクトにまとめられている。本書の執筆者は、実際に実験をしている若手研究者である。現場の研究者がそれぞれの専門分野で有用と考えるモデル動物が厳選されており、本書を見れば欲しい情報を容易に入手することができる。モデル動物は、疾患、生命現象ごとに分類されているが、索引を充実させたので、本書は様々な使い方ができるはずである。また、シリーズ既刊の「阻害剤活用ハンドブック」や「細胞・培地活用ハンドブック」と同様、ばらばらと眺めることにより様々な情報を得ることができ、読み物、教科書としても面白いはずである。読者がそれぞれの使用法で研究に役立ててくださることを期待している。本書が動物福祉の精神に則った効率的で倫理的な動物実験を行うのに最適なモデルの選択に貢献できるならば幸いである。

最後に一言。今回のハンドブックの企画・編集は、既刊の二冊に比べてなかなか大変であった。もし、羊土社の吉田雅博氏の粘り強い後押しがなければ本書は完成しなかったであろう。執筆してくださった方々と吉田氏に深く感謝したい。

2010年11月

編者一同